

# 異文化理解教育のための中国人留学生との接触促進の試み

寺西光輝

キーワード：異文化理解、異文化間教育、中国人留学生、グローバル人材、教育的介入

## 1. はじめに

社会のグローバル化が進むなか、わが国における多文化共生社会の実現や「グローバル人材」の育成が、大学教育における重要な課題となっている。また、大学における留学生の増加を背景に、学内の多文化環境を教育に生かそうとする取り組みが多く行われ、留学生と日本人学生がともに学ぶ授業などが盛んに試みられてきた（門倉1996、徳井1997、梶原2003、北出2010、中島2014など）。知識伝達型の一方的な授業から、学生参加型の主体的な学びへの転換が叫ばれるなか、学生が留学生を含む共同体に参加し、文化的背景の異なる他者と協働・交流するなかで学んでいけるような状況を大学内に作り出すことは、「グローバル人材」の育成にとって大きな意義を持つだろう。

さて、筆者は鹿児島大学において、全学共通の「グローバル教育科目」として新たに開設され、2016年度以降入学の全学生が受けることになっている「異文化理解入門」<sup>1)</sup>の中国編（3回の講義×10クラス）を担当している。しかし、70～150名程度が受講する日本人学生向けの大規模クラス内に、こうした異文化間協働の実践を取り入れることは難しい。その一方で、鹿児島大学には約300名の留学生（中国人留学生は約100名）が在籍しており、教室内での学習や今後の学生生活を、学内の多文化環境に結びつけていくことができれば、「異文化理解」を単なる一面的な知識の習得に終わらせず、「異文化間コミュニケーション能力」や、国際人としてのアイデンティティの育成につなげていくことも可能になると思われる。

ただし、普段から積極的に中国人留学生と交流を持とうとする日本人学生は多くなく、学生の中国や中国人に対するイメージも良くはない。そこで本稿では、日本人学生の持つ中国や中国人へのイメージを調査するとともに、本講義において中国人留学生へのインタビューの課題を出し、留学生との直接的な接触を通して、日本人学生がどのような印象を持ち、またいかなる教育効果が得られるのかについて初歩的な考察を行った。

## 2. 中国人留学生との交流と日本人学生の中国人観

### 2.1 わが国における留学生の増加と異文化間教育

近年、中国人の長期滞在者や訪日客等の増加にともない、日常生活において中国語母語話者との接触は比較的容易になっており、その言葉や文化等への理解は、わが国における多文化共生社会の実現という点からも重要なものとなっている。

また1983年に打ち出された「留学生10万人計画」や、2008年から実施されている「留学生30万人計画」のもと、わが国における留学生数も大幅に増加している。日本学生支援機構の「平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果」によると、2015年5月時点での留学生の総数は208,379名であり、前年から13.2%増加し、大学内の多文化化が進んでいる。そのうち中国からの留学生が94,111名、台湾からの留学生が7,314名と、中国語を母語とする留学生が半数近くを占めており、大学における多文化共生や異文化間教育を考えるのにあたって、その存在は大きな役割を担う可能性を秘めていると言えるだろう。

ただし、大学における留学生と日本人学生との異文化間交流は、同じ大学内で学んでいるからといって、必ずしも順調に進んでいくというわけではなく、むしろ両者による交流の機会の少なさがこれまでに指摘されている（杉本1999、藤井・門倉2004）。また、日本人学生と中国人留学生の友人関係について調査した戦（2007）は、自国の友人とは、教室のほかには食堂や電話・メールでの交流が多く見られるのに対して、相手国の友人との教室外での交流は少ないことを論じており、両者ともに自国の友人との交流頻度が高く、相手国の友人とは浅い関係にとどまっていることを指摘している。

なお加賀美・小松（2013）は、大学キャンパスにおける異文化間交流を阻む障壁として「情報の壁」「環境的障壁」「スキルの壁」「心理的な壁」「文化的な壁」の5つを挙げている。また大学内において両者の接触を促進するためには、学生の自主性に任せるのではなく、教員が何らかの「教育的介入」（加賀美1999,2006）を行っていく必要があると指摘し、それを「一時的に不可避な異文化接触を設定することで、組織と個人を刺激し、学生の意識の変容を試みる行為」（加賀美2006）と定義している。

## 2.2 日本人大学生の中国・中国人へのイメージ

さて、大学内における中国人留学生との接触が比較的容易になる一方で、近年の外交摩擦やメディアを通して得られる中国人像、そして中国人観光客の増加を背景に、日本人の中国や中国人に対する不信感が高まっている。内閣府の「外交に関する世論調査」（平成28年1月調査）によると、中国に対して「親しみを感じる」とする者の割合が14.8%であるのに対し、「親しみを感じない」とする者の割合は83.2%となり過去最高を記録した。

日本人のこうした中国あるいは中国人への不信感は、大学内の多文化共生にも影響を与えている可能性がある。その手がかりとして、まず「異文化理解入門」の参加学生を対象として、中国や中国人に対するイメージに関する事前調査を行った。自由記述により書かれた主な内容をカテゴリー化したところ、日本人学生の中国や中国人に対するイメージは、反日や、マナーの悪さ、大きな声の問題など、大部分が否定的なものによって占められていた（表1）。

この背景にはメディアからの影響がもっとも大きく関係していると思われるが、近年の観光客の増加に伴い、日本国内での実際の体験を通して得られた印象も、少なからず見られた（「声が大い」「道を占拠して歩く」「怒っているように見える」「割り込み」等）。

表1 日本人学生の中国・中国人に対するイメージ

| 項目         | 件数  |
|------------|-----|
| 反日         | 177 |
| マナーが悪い     | 119 |
| 声が大きい、うるさい | 80  |
| 爆買い        | 41  |
| 模倣（パクリ、偽物） | 32  |
| 料理が美味しい    | 31  |
| 環境汚染       | 23  |
| 怒っているような口調 | 17  |

### 2.3 鹿児島大学の取り組み

なお、鹿児島大学におけるグローバル人材育成プログラムとしては、P-SEG（Educational Program for Spirit of Enterprise in Global Contexts）があり、その一環として、希望する日本人学生3～5名に対し留学生1名がついて、グローバルランゲージスペース近辺で語学を教える「グロスぺ外国語」が行われている。2016年度においては、前期116名（留学生23名、日本人学生93名）、後期129名（留学生25名、日本人学生104名）の参加があり、そのうち中国語に参加した日本人学生は前期2名（1クラス）、後期5名（2クラス）であった（表2）。

表2 2016年度グロスぺ外国語参加者数

| 〈外国語の種別〉 | 〈2016年度前期〉 |        | 〈2016年度後期〉 |        |
|----------|------------|--------|------------|--------|
|          | グループ数      | 日本人学生数 | グループ数      | 日本人学生数 |
| 英語       | 17         | 73     | 14         | 63     |
| 韓国語      | 2          | 5      | 5          | 14     |
| スペイン語    | 1          | 2      | 2          | 7      |
| 中国語      | 1          | 2      | 2          | 5      |
| ポルトガル語   | 1          | 2      | 1          | 4      |
| インドネシア語  | 1          | 3      | 1          | 2      |
| フランス語    | 1          | 2      | 1          | 3      |
| ドイツ語     | 1          | 1      | 1          | 3      |
| イタリア語    |            |        | 1          | 3      |

英語以外では、韓国語の人气がやや高く（前期5名、後期14名）、中国語はその半分にも満たない水準にとどまっている。必修科目である初修外国語においては中国語選択者が圧倒的に多く（2016年度前期 初級中国語Ⅰ：438名、初級韓国語Ⅰ：147名）、また学内には中国語を日本人学生に教えたいと希望する中国人留学生が多くいるにも関わらず、単位を伴わない中国語学習や中国人留学生との交流に対する日本人学生の関心は、きわめて低いと言わざるを得ない。

### 3. 調査方法および結果

#### 3.1 対象者およびレポート課題

こうしたなか、大学内の中国人留学生との接触を促進する方法の一つとして、2016年度前期に開講した「異文化理解入門」の中国編では、評価方法（20点満点）をレポート提出か小テストを受けるかで選択できるようにしつつ、「中国人留学生へのインタビュー」のレポート課題を出した（ただし留学生以外の中国語圏の人物へのインタビューも可とした）。

|   |
|---|
| <p><b>レポート課題：</b>中国人留学生へのインタビュー</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・提出：3週目（X月XX日）の授業時</li><li>・インタビューの例<ol style="list-style-type: none"><li>1. 名前を中国語で聞いて書く（ピンインとカタカナも）</li><li>2. 愛称、出身地、趣味など（日本語でok）</li><li>3. 日本での生活や、カルチャーショックの体験などについて、自由にテーマを考えてインタビュー</li></ol></li></ul> <p>→これらの内容と自分の感想をまとめる。（字数については自由）</p> |
|---|

#### 3.2 レポート提出学生

1173名の受講学生中183名（15.6%）の学生が、この課題に取り組んだ。レポート提出時にアンケート調査を実施し、154名の回答が得られた。

#### 3.3 インタビューの相手について

インタビュー相手の内訳は、鹿児島大学の留学生にインタビューした学生が96名ともっとも多く、中国語（初修外国語）の先生20名のほか、他大学の留学生や中学・高校時代からの知り合い等、学外の人物へインタビューした学生も合計38名いた（表3）。

表3 インタビューの相手

| 相手                         | 人数 |
|----------------------------|----|
| 留学生（鹿大）                    | 96 |
| 中国語（初修外国語）の先生              | 20 |
| 留学生（鹿大以外）                  | 17 |
| その他（中学・高校時代の同級生や、家族の知り合い等） | 21 |

なお、鹿児島大学内では、全く面識の無かった留学生にインタビューした学生が多く、逆に学外では、もともと知り合いであった人にインタビューした学生が多い結果となった（表4）。

表4 相手との関係（中国語の先生をのぞく）

| 相手<br>関係             | 留学生<br>(鹿大) | 留学生<br>(鹿大以外) | その他 | 合計 |
|----------------------|-------------|---------------|-----|----|
| もともと知り合い             | 27          | 13            | 15  | 55 |
| 面識はあるが話した<br>ことは無かった | 12          | 0             | 1   | 13 |
| 面識無し                 | 57          | 4             | 5   | 66 |

### 3.4 鹿大留学生との接触方法

鹿児島大学の留学生にインタビューをした者のうち、「もともと知り合いだった」を選択した学生が留学生と知り合った場所は、サークル（10名）および授業（9名）が多く、さらにP-SEG／グロスペ（3名）との回答もあった（その他・不明5名）。また、「面識はあるが話したことは無かった」を選択した学生が留学生と接点があった場所は、授業・学科・専修（7名）が最も多く、次いでサークルが1名であった（その他・不明4名）。これらの点からは、鹿児島大学内で、一部の授業やサークルをのぞいて、日本人学生と中国人留学生とが出会う機会は、かなり限られていることが窺える。

なお、「全く面識が無かった」を選択した学生の留学生との接触方法では、友達、先輩、先生からの紹介（29名）が多く、次いで、自らグローバルセンターなど留学生のいる場所に赴いたり、学内で見かけたりした留学生に声をかけた学生（23名）も見られた（その他・不明5名）。

### 3.5 活動に対する評価

今回のインタビュー活動に関して、「大変そう思う（5）」から「全然そうは思わない（1）」の5段階評価を求めた（表5）。

表5 インタビュー活動への評価

| 項目                                | 平均値 |
|-----------------------------------|-----|
| 1. これまでに中国人や台湾人、香港人と交流する機会はよくあった。 | 2.1 |
| 2. インタビューを通して、中国人への印象が変わった。       | 4.1 |
| 3. 相手は友好的だった。                     | 4.8 |
| 4. 相手との関係が良くなった。                  | 4.3 |
| 5. 楽しかった。                         | 4.7 |
| 6. 勉強になった。                        | 4.7 |
| 7. 今回、インタビューをしてみて良かった。            | 4.8 |
| 8. これからも中国人留学生と交流したい。             | 4.5 |

これまでの留学生との接触機会についてはきわめて低い一方（2.1）、評価が高かったものでは、とりわけ相手の友好的な態度（「3. 相手は友好的だった」）が目立ち（4.8）、また満足度に関する項目（「7. 今回、インタビューをしてみて良かった」）も同様に高い結果となった（4.8）。これらの結果から、多くの留学生が日本人学生の突然の接触にも好意的に応じ、友好的で楽しい雰囲気

のなかで異文化理解が進み、日本人学生自身がこうした学習に高い評価をしていることが窺える。このことから、地方国立大学に在学する中国人留学生在が、異文化間教育や交流の相手として非常に大きな可能性を有していることが分かる。

#### 4. 自由記述から見た教育効果および問題

##### 4.1 教育効果

アンケートにおける自由記述<sup>2)</sup>の内容を分析したところ、教育効果については主に、1) ステレオタイプからの脱却、2) 中国の実情を知り、自国文化を再認識する、3) 授業で習ったことを実際の経験として知る、4) 自身の異文化間コミュニケーション能力に対する気づき、5) 異文化間交流の動機やきっかけを与える、といった5つに分類が可能であった。

##### 1) ステレオタイプからの脱却

今回インタビューを試みた日本人学生からは、留学生在が事前の予想に反して日本に好印象を持っているという点や、礼儀正しく、友好的であったことに対する驚きを述べた感想が多く見られた。

- ・マナーが悪いイメージなど、あまり良い印象を持っていませんでした。しかし大きな偏見でした。良い人でした。友好的でやさしかったです。(鹿大留学生)
- ・中国の人は反日が多いと考えていたので、とても優しく接してくれた時は驚き、情報に流されていた自分が恥ずかしくなりました。(鹿大以外の留学生)
- ・中国の人はすごく怖いイメージがあったので、質問をしてもとても嫌がられてしまうかと思っていました。だけど、とてもフレンドリーに会話をしてくれて、たくさん質問をしてもちゃんと答えてくれてとても良い人だなという印象に変わりました。(鹿大留学生)
- ・「日本人は礼儀正しい」と言ってくれたが、インタビューを受けてくれた相手の方がよほど礼儀正しく、国だけで人を判断するのはやはり間違っていると感じた。(中高の友達)
- ・元々、あまり中国人には良い印象がなく、礼儀も、物腰も良くないと思っていたが、まるで真逆だった。(鹿大留学生)
- ・自分は中国人に対して少し苦手意識をもっていました。実際にインタビューしてみると全然話しやすく感じました。やはり先入観などはあまりもつべきではないと思いました。(鹿大留学生)

もっとも、日本へ来る留学生在が、日本に良い印象を抱いていたり、日本人に友好的であったりする傾向があるのは当然ともいえるが、メディア等を通して得られた悪い中国人のイメージを通して留学生在を見ていた多くの学生にとっては、それが驚きであったようである。

なお、インタビューを試みた学生が、留学生在等に会う際にもともと持っていたものとして語られた中国人への印象をカテゴリー化したところ、前掲のアンケート(表1)と同様に、悪いイメージが多くを占めた(表6)。

表6 もともと持っていた中国人への印象（自由記述より）

| 項目                                   | 件数 |
|--------------------------------------|----|
| 反日                                   | 10 |
| マナーが悪い                               | 10 |
| こわい                                  | 2  |
| 声大きい                                 | 2  |
| その他（非常識、ガサツ、きつい、<br>堅苦しい、我が強い、気性が荒い） | 各1 |

このことから、インタビューを試み、積極的に中国人とふれあおうとする意識の高い学生さえも、相手の留学生等と向き合う際に、ステレオタイプの悪い中国人のイメージをあてはめて、心理的な壁を築いていたことが窺える。

それに対して、実際に留学生等にインタビューしたときの相手への印象は、「友好的」や「優しい」など、ほとんどが好意的なものであった（表7）。

表7 インタビューを通して受けた相手への印象（自由記述より）

| 項目         | 件数 |
|------------|----|
| 友好的・フレンドリー | 21 |
| 優しい        | 20 |
| いい人        | 8  |
| 快く答えてくれた   | 7  |
| 丁寧         | 6  |
| 礼儀正しい      | 6  |
| 明るい        | 5  |
| 親切         | 4  |

つまり、多くの中国人留学生は日本や日本人に興味を持ち、日本人学生との交流を望んでいるにもかかわらず、普段交流のない日本人学生からは、「反日でマナーの悪い中国人」というフィルターを通して見られがちであり、このことが障壁となって両者の交流を妨げている可能性がある。しかし実際には、日本人学生の突然のインタビューに対しても、多くの留学生がきわめて友好的な対応をとっており、そのことが、日本人学生にとって驚きであるとともに、先に挙げた満足度の高さにつながっている。

日本人学生は交流がなければ、身近に居ながらも学内の中国人留学生に悪い中国人像をあてはめたままである可能性が高い。その意味で、異文化間交流の心理的な障壁を取り除いたり、さらにはCEFRが「異文化間技能」の一部として掲げている「ステレオタイプに基づいた人間関係を乗り越えることができる力」（吉島ほか2008、p.111）を育成したりするためにも、「教育的介入」により、まずは身近にいる留学生に向き合う体験を作っていくことが大切であると言える。

## 2) 中国の実情を知り、自国文化を再認識する

また、留学生との会話を通して、中国や自国について新たな気づきがあった点についても、多くの学生が触れていた。

- ・ 普段は、あまり関わることのできない中国人の方に、日本のいいところや、中国人が日本をどう思っているのかなどが聞けて、とても充実した時間だった。(鹿大留学生)
- ・ 今まで、中国人の行動に対してあまり理解できないことが多かったが、文化の差異によっておこる、しかたのない部分があると気づき、批判的に見るのではなく、文化的な差異を知った上であいてと接することが大事だと感じた。(鹿大留学生)
- ・ 中国人からの日本の印象などきけて、自分達では気付かないようなことも聞けたのでよかった。(鹿大以外の留学生)
- ・ インタビュー活動は、異文化理解にとってもよい手段だと思う。相手の国を知るだけでなく、自分の国についても答えていくうちに、お互いに理解を深められた。(鹿大留学生)
- ・ 実際に話を聞いたりすることで、今まで気付けなかったことや新たに発見したりすることがあると思うので、今回の取り組みは非常に良いものだと思います。(鹿大留学生)

短期間の一方的な講義のみで、中国人や中国文化に関する知識を詰め込むことは、一面的な理解にとどまるうえ、それ自体が新たなステレオタイプを生むことにもつながりかねない。それに対してインタビューの実践では、短時間ではあるが実際に文化的背景の異なる他者と向き合うことで、直接的に文化や考え方に触れ、そのなかで中国人の目に日本や日本人がどのように映っているのかを知ったり、自国を相対化しながら異文化への理解を深めていったりすることが可能であった。

## 3) 授業で習ったことを実際の経験として知る

3回という限られた中国編の講義では、伝達できる内容にはかなりの制限があるが、授業で習ったことを、実際の交流の場で実践あるいは経験できたことについての言及もあった。

- ・ やはり台湾の人はかたくなに「台湾人」と言うのだな、とあらためて思った。(鹿大留学生)
- ・ 自己紹介を中国語でしてみた。言い方を修正された(笑) (鹿大留学生)
- ・ 日本語をあまり知らない人だったので、翻訳機能を知っておいて良かった。(その他)

台湾や香港の人々が、「中国人」扱いされることを嫌がるという点については、授業でその背景を含め説明したが、インタビューにおいて実際にこうした場面に遭遇した学生が数名いたようであり(なかには中国人ではないからとインタビューを拒否された事例の報告もあった)、レポートにもその点に触れて「授業で習ったことと同じだと思い勉強になった」との記述が見られた。さらに、授業で簡単な自己紹介や、翻訳機能を使って自分の中国語名等を調べる作業をしておいたことが、実際の交流の場面でも役立ったようである。

## 4) 自身の異文化間コミュニケーション能力に対する気づき

今回、多くの学生が日本語でインタビューをしており、留学生の日本語レベルが高かったことに関

する感想が多く出たほか、一部コミュニケーションがうまくとれなかった学生からは、自己の語学力不足に関する言及があった。

- ・半分英語で話してくれたが、私の語学力不足で聞き取れないこともあり、くやしい。(鹿大留学生)
- ・英語が話せるが、日本語が少ししか話せない子がいて、その子に自分が質問したいことを英語でうまく伝えられなくて、もっと留学生とスムーズに話せるように英語力をつけたいです。(鹿大留学生)
- ・私の下手な中国語を聞こうとしてくれたことが嬉しかったです。留学生日本語うまいなーと思いました。(鹿大留学生)
- ・もう少し中国語を知ってからだったらもっと会話ははずんだかもしれないと思いました。(鹿大留学生)

このようにコミュニケーション上の困難を経験することが、自身の異文化間コミュニケーション能力の不足に対する気付きを与え、さらに外国語学習への動機付けにもなっている。

#### 5) 異文化間交流の動機やきっかけを与える

また交流そのもののきっかけになった点についての、肯定的意見も多く見られた。

- ・自分だけじゃ、海外の人に関わることなどなかったように思われるので、こういった機会があったてよかったです。(鹿大留学生)
- ・中国人と交流するきっかけになりました。他の言語もインタビューの課題があればいいのと思いました。(鹿大留学生)
- ・このような場がないと留学生の方と関わるのがないので、とても良い経験になりました。(鹿大留学生)
- ・授業の宿題として出されない限り、中国の留学生に声をかける機会などなかったと思うので、とても良い機会を与えてもらったなと思いました。(鹿大留学生)
- ・インタビューをするという目的があったおかげで、留学生と知り合えて良かった。(鹿大留学生)
- ・初対面なおかつ外国人ともなるとなかなか機会のないことだったので、今回のインタビューの活動で経験できてよかった。(鹿大以外の留学生)

今回の実践では、小テストかレポートかを選択できるなかで、183名の学生があえて手間のかかるレポートを選択した。このことから、中国人に対する悪いイメージを持ちながらも、授業を通してほんのすこしのきっかけを与えれば、留学生との交流を試みる日本人学生は、大学内に少なからずいることが分かる。

異なる文化的背景を持つ多くの学生が在籍する大学キャンパスにおいても、一部の授業やサークルをのぞいて、日本人学生と留学生の両者が知りあう機会は多くなく、また学生からの行動も取りづらい面がある。大学の多文化環境を生かし、異文化間交流に興味をもつ学生への動機付けやきっかけを

与えるためにも、学生任せにするのみではなく、教員からの積極的な働きかけ、すなわち「教育的介入」が重要であることが裏付けられる結果となった。

#### 4.2 問題点および改善点

自由記述において、今回の活動の問題点や改善点についての意見を求めたところ、主に、1) 一部の留学生への負担、2) 留学生と接触することの困難さ、についての回答が得られた。

##### 1) 一部の留学生への負担

鹿児島大学では、グローバルセンターや大学院にはある程度中国人留学生がいるものの、学部在籍する留学生は限られている。そのため、同じ学部や学科に所属する中国人留学生は、入学したばかりの日本人学生にとっては、もっともコンタクトをとりやすい相手であり、インタビューが集中してしまうことがあったようである。

- ・自分以外にも何人かにすでに受けていたみたいで、何回も答えてもらうのは少し申し訳なかった。(鹿大留学生)
- ・留学生の子が学科に一人だったので一週間色々な人に時間をとられて大変そうだった。(鹿大留学生)
- ・おそらく何人かからも質問を受けていたであろう気がしたので、少し申し訳なかったです。(鹿大留学生)

もっとも、大学に入ったばかりのこうした中国人留学生が、同じ学部や学科の日本人学生と仲良くなるきっかけを作るという点では、こうした試みにはメリットがあるとはいえ、仲が良いわけではない日本人学生に何度も同じことを聞かれ、大きな負担になってしまっていた可能性がある。よってこうした取り組みでは一部の留学生へコンタクトが集中しないような配慮が必要である。

##### 2) 留学生と接触することの困難さ

今回は、学生がインタビューの相手を見つけるのに当たって、留学生が集まるグローバルセンターの場所を示した以外は、担当教員からの紹介等は一切行っていない。そのため、留学生にインタビューするというハードルの高さが問題になった。

- ・知り合いにいないとインタビューしづらい。(鹿大留学生)
- ・接触がなかなか困難。(鹿大留学生)
- ・中国人留学生のいる授業などを事前に教えてほしい。(鹿大留学生)
- ・話しかける勇気がないとレポートがかけない。知り合いがいる人が有利である。(鹿大留学生)
- ・中国人の知人がいる人というのは少ないので、もっと紹介していただきたかったです。(鹿大留学生)

今回の実践では、一部の積極的な学生を除いて、インタビューしたくてもできなかった者も多くいたと思われる。より多くの学生が課題に挑戦できるよう、留学生との交流の場を整えつつ、それを授

業と関連付けるなどして、大学全体として異文化交流の体制を整えていく必要がある。

## 5. まとめと今後の課題

今回の調査からは、多くの日本人学生が中国人に対して悪いイメージをもち、またそれを学内の中国人留学生にも当てはめ、心理的な壁を築いている傾向が窺えるものの、機会さえあれば交流してみたいと望んでいる学生も少なからずいることが分かった。ただし、大学内に交流の場を設けてあるだけでは、必ずしも日本人学生がそこへ積極的に参加するとは限らず、むしろ授業等を通じた教員による介入やきっかけ作りが重要であることも明らかになった。一方で中国人留学生の側も、日本人学生のインタビューに真摯に対応しており、両者を結びつけることができれば、そこに多くの学びが生まれることが分かった。大学の多文化環境、とりわけ中国人留学生の存在は、「グローバル人材」の育成を含め、今後の大学教育にとって大きな価値を有していると言えるだろう。

ただし今回の試みでは、インタビューによる一時的な接触を促したに過ぎず、その後の両者の関係にどのような影響を及ぼしたかは不明である。また、本稿ではインタビューに成功しレポートを提出した学生の事例のみを集め検討したが、実際には、インタビューをしたかったにもかかわらずできなかった学生や、うまくいかなかった学生等もいたと思われる。今後学内の中国人留学生との交流を進め、そこに効果的な学びを創出していくためには、より深く、また大学生活全体にわたって両者が交流し協働していく環境を整えていくとともに、そこで起こる学びに加え、障壁・葛藤・トラブル等についても詳細に検討していく必要がある。

グローバル人材の育成は、なにも英語教育や、日本人学生を海外へ留学させることによるのみ達成できるというわけではない。今回の実践は、ほんの第一歩にすぎないが、今後中国人留学生を含め、さまざまな国からの留学生との関わり合いのなかで大学生活を送ることのできる環境を築いていけば、国内の大学で学びながらも、グローバルな視野やアイデンティティ、コミュニケーション能力等をもった学生を育成していくことは、十分に可能である。

## 付記

本稿は、2016年9月3日に鹿児島大学で開催された第65回九州地区大学教育研究協議会における口頭発表をもとに、加筆修正したものである。

## 注

- 1) 本科目は、1年次の前期（一部2年次）に開講され、13クラス（2016年度）において、3回ごとに教員が入れ替わるオムニバス形式で、計15回に渡って中国のほか、韓国、フランス、ドイツ、イスラム圏の各言語および文化に関する講義が行われる。
- 2) 自由記述の引用にあたっては、（ ）内にインタビューの相手を示した。

## 参考文献

- 藤井桂子・門倉正美2004.「留学生は何に困難を感じているかー2003年度前期アンケート調査からー」『横浜国立大学留学生センター紀要』11：113-137。
- 門倉正美1996.「留学生と日本人学生との混成クラスの試みー教養教育「異文化間コミュニケーション論」授業報告」『横浜国立大学留学生センター紀要』3：55-67。
- 加賀美常美代1999.「大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入」『コミュニティ心理学研究』2（2）：131-142。
- 加賀美常美代2006.「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるかーシミュレーション・ゲームと協働的活動の場合ー」『異文化間教育』24：76-91。
- 加賀美常美代・小松翠2013.「大学コミュニティにおける多文化共生」加賀美常美代編『多文化共生論ー多様性理解のためのヒントとレッスン』明石出版：265-289。
- 梶原綾乃2003.「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117：93-102。
- 北出慶子2010.「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案ー異文化間コミュニケーション能力理論と実践からー」『言語文化教育研究』9：65-90。
- 内閣府2016.「外交に関する世論調査」（平成28年1月調査）  
<http://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-gaiko/index.html>（2016年12月16日アクセス）
- 中島祥子2014.「多文化間プロジェクト型協働学習における留学生の学びー留学生と日本人学生がともに地域を学ぶプロジェクトから」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』65：133-148。
- 日本学生支援機構2016.「平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果」  
[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student/data2015.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2015.html)（2016年12月16日アクセス）
- 杉本妙子 1999.「異文化理解のための日本人学生・留学生混成クラスの効果と問題点 IIー外国人留学生に対する教育効果を中心にー」『茨城大学人文学部紀要 コミュニケーション学科論集』5：43-58。
- 徳井厚子1997.「異文化理解教育としての日本事情の可能性ー多文化クラスにおける「ディベカッション」（相互交流型討論）の試み」『日本語教育』92：200-211。
- 吉島茂・大橋理枝（他）訳・編2008.『外国語教育IIー外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社。
- 戦旭風 2007.「友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係」『留学生教育』12：95-105。